

マリンバを素材とした「音楽づくり」の実践的研究
ーグルー
プ学習によるマリンバアンサンブルの「音楽づくり」を通してー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Shinohara, Hideo, Tokuda, Noriko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00051120

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



マリンバを素材とした「音楽づくり」の実践的研究

－ グループ学習によるマリンバアンサンブルの「音楽づくり」を通して －

A practical examinations of “music making” as ingredients of a Marimba
— Analyzing “music making” as ingredients of
a marimba ensemble by the group learning —

篠原秀夫・徳田典子

Hideo SHINOHARA, Noriko TOKUDA

音楽専科以外の教師の多くが、「音楽づくり」の授業を経験していないこともあり、この授業が必ずしも効果的に行われていない状況が散見される。そういった背景もあり、平成 26 年 11 月 14 日、国立教育政策研究所教育課程研究センターから、小学校音楽科の表現領域である「音楽づくり」の授業の更なる充実のために、指導資料が作成された。このように教員向けの指導資料を作成するのは、今回が初めての試みであり、筆者は、これからの音楽科教育を示唆しているのではないかと考える。そこで、それら指導資料を下敷きにして、21 世紀型能力の「思考力」に示されている「創造力」について着目し、マリンバを素材とした「音楽づくり」の実践研究をおこなった。

キーワード 創造力／マリンバ／音楽づくり

はじめに

平成 26 年 11 月 14 日、国立教育政策研究所教育課程研究センターから、「小学校音楽映像指導資料 低・中・高学年 楽しく実践できる音楽づくり授業ガイド」として、DVD3 巻が作成された。この DVD は、低・中・高学年の学習場면을多数紹介し、指導上の留意点や子どもの表現のポイントなどをわかりやすく説明したものである。

筆者は、「音楽づくり」が次期学習指導要領改訂に向けての音楽科の重点として示唆されていると考え、この指導資料を下敷きにし、マリンバを素材とした「音楽づくり」の実践をおこなった。

素材のマリンバは、打楽器に属しているが、メロディ、リズム、ハーモニーを兼ね備えた楽器であり、1 台で 4 オクターブから 5 オクターブの音域がある。マレットの大きさや固さなど、材質をかえることにより、多様な音色を表現することが出来る。また奏法を工夫することにより、音楽表現が幅広くなり、マリンバ特有の木の音色が心地よく広がる点が魅力ともいえる。

小島(1999)⁽¹⁾によると、「音楽づくり」のどの

段階においても、社会的衝動が働き、人とつながろうとする欲求に従って活動は発展していくと示している(p.73)。本校の児童は、音楽づくりの活動に対しては肯定的な回答をしているが筆者は、児童自らの心をつき動かして助け合い学習目標を達成するような学習活動はなかなか生まれにくいと感じてきた。ここでは、グループ学習を取り入れる学習を構想することで、さらに児童の主体的な取り組みを促すための活動にさせたいと考えた。

そこで、マリンバを素材としグループ学習を主体とした本研究は、教育的にどのような意義があるのかを考察する。

1. 「音楽づくり」の学習に対する児童の意識調査の実際

本研究にあたり、児童が音楽づくりの学習について、どのような意識をもっているのかを調査した⁽²⁾。

- 1 音楽をつくる活動のとき、自分のイメージや思い、場面や様子などを音や音楽で表現することは好きですか。
- 2 音楽をつくる活動のとき、自由な発想を活かして、いろいろな音楽表現を楽しんでいますか。
- 3 音楽をつくる活動のとき、音楽の仕組みを生かす工夫をしていますか。
- 4 音楽をつくる活動のとき、音のひびきやその組み合わせを工夫していますか。
- 5 音楽をつくる活動のとき、友だちとひとっしょに活動することを楽しんでいますか。

■ 好き □ あまり好きではない □ どちらでもない

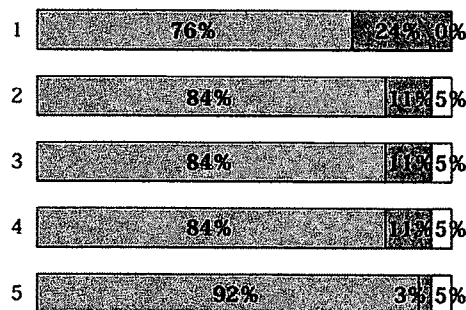


表1 「音楽づくり」意識調査

音楽づくりの学習に関する児童の意識では、好き、どちらかといえばあまり好きではない（どちらかというところではない）、その他の三段階の回答とし実施した。1「自分のイメージや思い、場面や様子などを音や音楽で表現することは好きですか。」では、肯定的な回答を（「好き」）した児童は、76%であった。2「自由な発想を活かしていろいろな音楽表現を楽しんでいますか。」に対しては肯定的な回答（「そうしている」）をした児童は 84%であった。次に、音楽づくりに関わる内容をみると、3「音楽をつくる活動のとき、音楽の仕組みを生かす工夫をしていますか」に対しては肯定的な回答（「そうしている」）をした児童は 84%であった。4「音のひびきや組み合わせを工夫していますか」では肯定的な回答（「そうしている」）をした児童は、84%であった。このように、8割の児童が音楽づくりの学習に対して、

肯定的な回答をした。5「友だちとひとっしょに活動することを楽しんでいますか」では肯定的な回答（「そうしている」）をした児童は、92%であった。9割の児童が「友だちと活動すること」に対して肯定的な意識があることがわかった。

そこで、本研究では、音楽をつくる活動においては、4の「音のひびきやその組み合わせを工夫する」に重点を置くこととし、5の結果を受けて、学習の主体をグループとすることにした。何より、8から9割の児童が音楽づくりの活動に対して、肯定的な回答をしていることを受けて、この結果が反映できるような題材構成のあり方を探っていきたいと考える。

2. 「音楽づくり」の実践の概要

実践は、金沢大学人間社会学域学校教育実践研究附属小学校の第5学年の音楽科の授業において実施したものである。対象児童は112名である⁽³⁾。

(1) 指導の実際

- ・題材名：マリンバアンサンブルをつくろう
～ドローンの音をつかって～
- ・題材のねらい：和音に含まれる音を用いて、音楽の仕組みを生かしたマリンバアンサンブルをつくったり演奏したりする。

・題材計画：総時数9時間＋課外

- 第一次 マリンバアンサンブルの構想を考える (2時間)
- 第二次 マリンバアンサンブルをつくる (4時間)
- 第三次 マリンバアンサンブルのまとめの演奏をする (3時間)

本実践では、音の重ね方を工夫してマリンバアンサンブルをつくることをねらった。音素材はマリンバとし、ドローン、インターロッキングの音楽の仕組みを生かした旋律などを取り入れ、4種類のパートによるまとまりのある音楽をつくった。全体の構成としては、既習したハ長調のⅠ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅴ₇の和音を用いて、6小節の楽曲をつくり表現の工夫をした。特に演奏の仕方では、4種類の旋律をグループのメンバー全員が次々に

交代して演奏するという演奏形態を工夫させることにした。そこで、これまで既習したカノン形式によるマリンバアンサンブルやインターロッキングの仕組みを生かした音楽づくりによる経験をもとに、意欲的にマリンバアンサンブルをつくる。

第一次の題材の導入では、このマリンバアンサンブルの音楽づくりを意識した参考曲を鑑賞させる。鑑賞曲では、ドローンの音の響きや効果、マリンバアンサンブルの奏法、演奏形態など必要な音楽の要素が感じ取れるような提示をする。その上で、各パートの役割や音楽の仕組みなどの音楽づくりの約束事を確認する。またどのようなテーマのマリンバアンサンブルにするかをグループで話し合わせ、楽曲の構想を考えさせる。ここでのグループは、音楽づくりをする環境を考慮して学級を3グループに分ける。

第二次では、グループでマリンバアンサンブルをつくる。まず、この題材における音楽づくりの約束事として、曲の和音進行Ⅰ・Ⅰ・Ⅳ・Ⅳ・Ⅴ₇・Ⅴ₇の6小節を指定した。マリンバの鍵盤の3～4オクターブを使用することで、その音域に適した旋律を4種類(主旋律・ドローン・和音・オスティナートバス)をつくることとした。また、和音とオスティナートバスについては、インターロッキングの仕組みを生かした音型を取り入れる。主旋律を構想することについては、グループで考えたテーマのイメージに近づくように思いをもって音楽をつくる。ドローンについては、民族音楽でよく使用される演奏であるが、ここでは、バグパイプの演奏における低音の聴き取りから、その演奏効果を確認し、音楽づくりに取り入れることを意識させた。音域は本来の低音に限らず、テーマのイメージに近づけるための効果的な表現方法の一つとしてとらえさせる。マリンバの場合は、ロールやトレモロの奏法を使用することで、音を持続させる。また、より多くの児童が演奏に参加することを考慮して、伊藤康英作曲のくぐるぐるマリンバ>のカノン形式(輪奏)の演奏形態を参考にした。

第三次では、まとめの演奏をするにあたりつ

くった曲を聴き比べる活動をする。マリンバの音色やマレットのコントロールの仕方や奏法など、グループの表現に必要なことを友だちのアドバイスを通じて気づかせたいと考える。またマリンバアンサンブルの範奏を鑑賞することから多様な演奏形態に気づかせ、グループの演奏形態を柔軟に考えさせる。

(2) 「音楽づくり」の過程

本研究では、小島(1999)⁽⁴⁾のデューイの「オキュペーション」の概念を手がかりにした音楽づくりの分析より「音楽づくり」の過程として大きく4つの段階ととらえる方法をもとに、実践を紹介する。

- | | |
|-------------|--|
| 第1段階 | 「構想の過程」 テーマから発想を得て作品の全体的な構想を立てる過程 |
| 第2段階 | 「探究の過程」 音楽づくりの材料を探す過程 |
| 第3段階 | 「構成の過程」 材料を音楽作品に構成する過程 |
| 第4段階 | 「表現の過程」 作品のより美的なおもしろさを求める過程 |

3. 実践

本研究の指導の実際は、5年3組37名の第二次からの実践の実際を抜粋する。

(1) 第1段階 「構想の過程」

テーマから発想を得て作品の全体的な構想を立てる過程

- ①音楽づくりの約束事を確認し、どのようなテーマのマリンバアンサンブルにするかを考えさせる

グループでは、まず指定した和音やその移り変わりを生み出す響きを感じ取らせる。その上でテーマを決定させた。テーマ決定後、このマリンバアンサンブルの全体的な構想をストーリーにすることで組み立てる。

・Aグループ

テーマ：海

ストーリー：家族が海に遊びに行きました。そこで、サメに襲われそうになりました。すると、小さな魚の群れが助けてくれて、楽しく残りの時間を楽しみました。

・B グループ

テーマ：ジャングル

ストーリー：ある日、ジャングルへ冒険に行きました。ジャングルにはいろんな動物がいました。冒険の途中でライオンに見つかってしまいましたが、大きな鳥の背中に乗せて助けてもらい、家まで送ってもらいました。

・C グループ

テーマ：木かげ

ストーリー：暑い日、女の子は木かげをさがしていました。その時、遠くから女の子を呼ぶ声が聞こえてきました。声の方に近づくと、大きな木がありました。女の子が読書をしていると、小動物が集まってきて、一緒に遊びました。

(2) 第 2 段階 「探究の過程」

音楽づくりの材料を探す過程

①あこがれを感じさせる楽曲と出会让せる

音楽をつくる材料を用意する探究の段階では、この題材の材料であるマリimbaについての活動を進めていく。そこで、探究的衝動をより活性化するために、よりあこがれを感じさせる楽曲と出会让せた。はじめは本題材の参考曲として伊藤康英作曲のくぐるぐるマリimbaである。この楽曲の聴き取りの後に、マリimbaアンサンブルの演奏体験をした。この体験によって、4つの旋律の働きを認識した児童は、互いにこの楽曲のおもしろさや魅力を伝えようとした。この楽曲では、演奏形態の面白さや多様性を体感させる。

②音素材をマリimbaに限定する

この題材の材料であるマリimbaに対しての探究的衝動によって、活動を進めていった。児童には試しの演奏をすることで、さまざまなマレットの音色を聴かせ、描いたイメージの世界を意識させた。マレットの種類を換えると、音色が変わることや奏法によっても変化すること

にも気付かせた。また、イメージにあった旋律をつくるには、どのような奏法がいいのかを客観的にみつめることができるようにさせた。ドロンの効果をマリimbaアンサンブルに取り入れるには、奏法としてロールやトレモロ奏法を用いることにも気づかせる。

③ドロンの効果を感じさせる

次に、マリimbaアンサンブルをつくることを意識した参考曲を鑑賞する必要があると考える。特にこの音楽づくりでは、ドロンの音の響きや効果を取り入れたいと考えた。

そこで、民族音楽のバグパイプの演奏を鑑賞させることから、ドロンの効果を感じさせる。

児童にこの段階の過程について質問したところ、次のような記述となった。

この曲(アメージンググレース)では、ドロンの取り入れることで、何かやけど感や空気を動かすようなものが感じられました。ドロンの音が変わるごとに、イメージがガラリと変わりました。聞いていて、見える風景が一変したかのようで、おどろかされました。ドロンを使うと 1 音 1 音が何かを押し出して前へ前へ行っているかのようでした。きっと、私のグループの「海」の曲にもドロンを取り入れれば、とてもいいふんいきが生まれるんじゃないかなと思います。無理かもしれないけど、イメージを強くするために、ドロンパートを加えたら、とてもいい曲になると思いました。大きな音がしたり、大きな物が動いたりする、見て感動するかなのような大自然の中にいるようでした。アメージング!

(5 年 3 組 A 児の感想より)

このように、「探究の過程」では、児童に参考曲の演奏を体験させることや音素材の探究的体験を充分にさせてから、音楽づくりに入ることが大切だと考える。また、「探究の過程」をさらに深めるために、鑑賞曲を取り入れて、音楽づくりに必要な要素についてポイントを絞ってその効果を感じさせていくことも必要だと感じる。

(3) 第3段階 「構成の過程」

材料を音楽作品に構成する過程

①インターロッキングの仕組みを生かした低音をつくらせる

5年3組の児童は「探究の過程」での体験を得て、旋律にはどのような奏法がいいかなどを比較的客観的にみつめることができるようになってきた。この段階では、メンバーを主旋律、低音、ドローンの各グループに分ける。低音では、2つのパート(オスティナートバスと和音)をインターロッキングの仕組みを生かしてつくる。インターロッキングの特徴である入れ子のリズムを体感するために、簡単な絵譜を用いて可視化し、実際に体験することで、リズムのかみ合わせをイメージさせた。

例

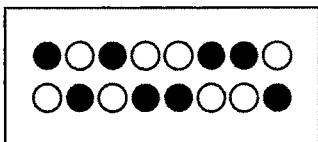


図1 2つのパートを示すワークシート

図1では、○は手をたたき、●は休むことを示している。二つのグループに分かれて、上段下段の絵譜に手拍子をいれると、インターロッキングの入れ子のリズムを理解することができる。考えたリズムをもとに、マリンバを使用して、和音進行の約束事を意識した低音の音型を構成していく

②主旋律とドローンの効果を取り入れた旋律をつくらせる

マリンバの同じ音を持続して演奏する奏法を取り入れることで、ドローンのもつ役割や効果が発揮させる。ここでのドローンは、低音に限らず、テーマのイメージに近づけるためにどの音域を使うかは柔軟に考えさせる。また、ドローンを加えることによって、マリンバという楽器の豊かな響きが、各グループの音楽に特徴的な印象を与えることになると考える。

5年1組の児童にこの段階の過程についての演奏の聴き取りをしてから質問したところ、次のような記述となった。

Aグループの「波」では、波の音が上手く表現されていて良いと思った。おだやかな感じがして、ドローンがきれいだった。サメにおそわれているところがよく分からなくなった。だけど、終わり方が良かった。

Bグループの「ジャングル」では、ジャングルを探検しているように聴こえた。ハモリがとても良い。最後にドローンが2回入って終わるところがよいのでまねしたい。それからいろんな動物がいるようだった。

Cグループの「木かげ」では、最初ドからだんだん上がっていくところが耳に残った。ドローンがあると、木かげって感じがした。風ゆれている葉の音のような部分もあって、よく考えているなと思った。同じ学年でも、まるでプロのような演奏ですごいと思った。僕たちのグループでもっと協力してテーマに合う演奏が作りたかったです。

(5年1組 C児の感想より)

この過程の全体の構成としては、指定した和音進行 $I \cdot I \cdot IV \cdot IV \cdot V_7 \cdot V_7$ の6小節の構成音を使ってそれぞれの旋律としてつくる。それぞれの旋律は和音の構成音をつかって演奏することから、不協和音などの不具合な点については、この過程における客観的な認識によって選択する力が働いてくる。

そこで、まずグループでつくった曲が、テーマを意識した一つの楽曲として構成されているかを確認する。特に主旋律は、テーマのイメージを醸しだしているか、他の旋律は主旋律にどのような影響を与えているかを意識する。

また、この音楽づくりでは、2つの旋律(オスティナートバス・和音)を重ねて演奏する低音とドローンをどのような効果として取り入れているかを確認する。ここでは、各グループが試しの演奏をしながら音を音楽に構成していく。このようなくり返しから、友だちと協同してものをつくるという連帯感が生み出されると考える。

③楽曲のイメージを絵に構成させる

小島(1999)⁷⁾によると、絵には、論理的な部分が描かれ、その部分が曲を形づくるための枠組みにあると述べている。そこで本実践では、

それぞれの旋律が完成した段階で、楽曲のイメージを絵に構成することで、どのようなイメージで曲が構成されているのかを絵によって見取る方法を取り入れた。

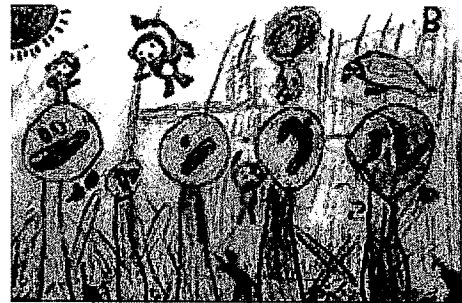
構成の過程では、各グループで考えた4つの旋律を、テーマタイトルのストーリーを意識して組み合わせることで、一つの作品をつくりだそうとした。児童の絵からは、構成のためにどのようなイメージにするのかを選択していることが見取れる。例えばBグループの「ジャングル」については太陽・大きな鳥・動物たち・ライオンという場面が絵に描かれている。

Bグループの音楽の特徴は、インターロッキングの仕組みを利用して低音としてつくった2つの音型を、高い音域で演奏することに修正したことである。2つの旋律がかみ合わされるおもしろさを友だちとジャングルへ冒険に行くというわくわくとしている気分をさらに高めるために工夫した。また、児童は主旋律を演奏する音域をじっくりと考えていた。絵にあるようにサルが木のうえではしゃいでいる様子を、和音の構成音を組み合わせることで、明るい旋律に構成したいと考えていた。この過程では、4つの旋律をテーマの気分が醸し出される音域に定めることを第一にとらえることで、どのように構成するかを考え始めた。また、Bグループのストーリーには、ジャングルの冒険の途中で、ライオンに見つかってしまったという部分がある。このBグループのストーリーがより反映する手段としては、ライオンに見つかるという危険な雰囲気やドローンの効果を低音部分の音域で重量感をもたせて演奏することから表現しようとしていた。絵からは危険なライオンは、低い位置に描いていることから、ドローンを低音域に選んだことがうかがえる。

このように絵による構成には、児童が考えた音楽の構成や意図がはっきりと表現されている。

また、絵で可視化することからは、つくった音楽が感覚的に出来上がったものではなく、意図をもって構成していることが見取れる。

この「構成の過程」では、児童の感想にあるように、友だちと協同して音楽をつくりあげている様子に変容がみられるようにあった。



絵1 絵による構成

(4) 第4段階 「表現の過程」

作品のより美的なおもしろさを求める過程

①曲の構成を考えさせる

4つの旋律が出来上がり、一つの音楽として形が整ってくると、作品のおもしろさを表現がしたいという気持ちが前に出てきた。より音楽の意図を伝えたいという思いは、テーマによっては、より美しくしたい、さらに変化のある演奏にしたいなど様々である。この過程では、聴き手を意識する段階に入る。

児童は、「構成の過程」において、テーマを意識して考えた4つの旋律をマリンバのどの音域で演奏するかを決めた。あらかじめ低音としてつくった2つの旋律であっても、各旋律のおもしろさを表現するためには、音域を固定せずに曲の構成を考え始めた。また、各グループで反復や問いと答えなど、どのような音楽の仕組みを意識するとストーリーが伝わるのかを客観的に考えた。Bグループでは、はじめにインターロッキングの仕組みを生かして考えた2つの旋律と主旋律を組み合わせた演奏を2回する。その後、この組み合わせにドローンを加える演奏を2回する。また、曲が終止するために、最後にはcodaをつくった。曲の反復する回数には、13人が交代で全員が演奏することを考慮したくりかえしが意識されている。Bグループの表現の特徴としては、曲の始まりに前奏をつくったことである。音楽づくりに使っ

たI・V・V₇の和音の構成音を組み合わせ、マリンバのトレモロ奏法でよりオープニングに期待感を高めるようにした。マレットの選択では、既成のマレットの使用の仕方だけでなく、テーマのジャングルを意識するために、マレットの持ち手の木の音を利用して表現する工夫をした。

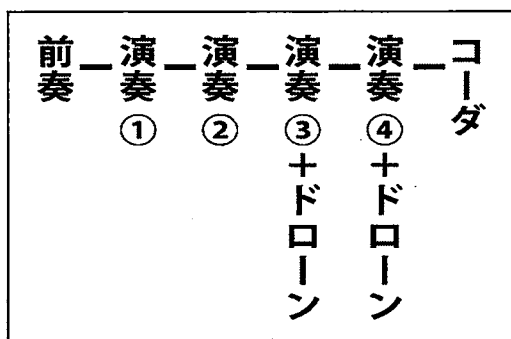


図2 Bグループ曲の構成

②演奏形態を工夫させる

演奏形態については、参考曲を演奏することでカノン(輪奏)形式^⑧を体験させた。カノン形式は、一人で4つの旋律をすべて演奏する技能が必要となる。曲が途切れずに演奏されないとカノン形式としての音楽のよさが表現されない。児童は演奏体験を通じて、グループのメンバーとの心の結びつきをつよめるよさを実感していた。また、児童は演奏をくりかえすという体験をすることから、演奏形態をはっきりさせることが、より音楽の意図を伝えるために大切だという表現的衝動が高まってくる。そのことから演奏する行為と意図との一致を見つけ出すことの重要性を見い出す。

著者は、本研究の音楽づくりの価値がこのカノン形式のように演奏形態そのものにも見出すことが出来ると感じている。グループには、演奏の得意な子もそうでない子もいる。それが学級のグループでの演奏である。グループでは演奏が苦手なメンバーを出来るように引き上げないと演奏自体が出来ない。一人一人の性向や経験や考えの異なった児童がグループ学習という中で、助け合って学習に取り組めば、対

立もあるし、矛盾も出てくる。それを克服し合う過程を得ることにこそ、このグループで活動する意義があると考えている。Bグループでは図3のような演奏の形式を考えた。児童は、この形態を専門家形式と名づけて、13人のメンバーが全員活躍できることやつくった音楽がより意図をもった表現となることなどを意識していた。①～④の表示は、図2の曲の構成の通りに演奏する順である。

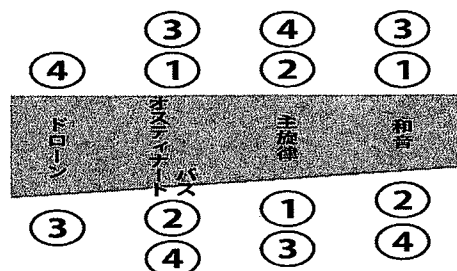


図3 Bグループ演奏形態

この段階にくると、児童は、まとまりのある演奏にするためには、どのようなことに気をつけたらよいのかを真剣に考えている。グループ学習を通じて演奏活動をくりかえすことからはチームワークの必要性にも気づく。そこで、この過程の終末に学年全体によるマリンバアンサンブルの鑑賞を取り入れた授業を展開した。実施するにあたり、タイトル、曲のイメージ画の提示、つくった音楽の簡単なストーリー、曲の構成図、演奏形態を示す図を準備し、解説してから演奏に臨んだ。ここでは、マリンバ特有の音色、奏法、マレットコントロール及びマレット交換など、表現の技能がはっきりと表れるような演奏を心がけた表現が展開された。

以下は、児童の考えた演奏形態でマリンバアンサンブルを鑑賞及び演奏体験したことについて質問したところ、次のような記述となった。

1番驚いたのは、3組のBグループ「ジャングル」です。前奏では、危険が近づいてきていることをだんだん音を大きくしていくという工夫で表しており、その演奏に引き込まれていきそうな気がしました。ドローンもちゃんと役目を果たしていて、本当に文句なしの演奏じゃないかなと思いました。みんな一から、全く同じ条件で曲づくりをしているのに、全然ちがう曲になっていました。ぐるぐるマリンバアンサンブルは、みんなの努力のかたまりです。この題材では、協力の大切さを学びました。1人でも失敗してしまったら、みんなも道づれになります。なので、緊張感をもち、集中してスクラムを組んで物事をする力がついたと思います。友だちに演奏を聴かせるために、このBグループでは、専門家方式で演奏していました。メンバーの交代をスムーズにおこなっていたのが印象的でした。立ったり座ったりとすごい工夫でした。ぼくは、今日の演奏をお父さんやお母さんに見せてあげたかったです。発表会は、たくさん工夫を見つけました。このことを生かして、また新しいことにも取り組んでいきたいです。
(5年2組 B児の感想より)

児童の感想にあるように、マリンバアンサンブルの鑑賞をする授業を実施したことは、児童のつくったオリジナルの楽曲を客観的にみつめる手だてとなった。その他として、同じ条件で全く違うイメージの曲が出来上がっていたことや演奏をするために、演奏形態を工夫する必要感や友達との絆がより深まったという感想も多くあった。また、音素材のマリンバ独特の音色の美しさやイメージを表すために工夫されていた奏法などへの気づきがあった。

4. 本研究の実践にかかわる検証の実際

指導の実際として取り上げた題材にかかわる授業後アンケートの実態を示す⁹⁾。

(1) 検証の実際

本実践の検証の実際は、第5学年112名による結果を取りあげる。また本実践では以下に示す事後のアンケートを実施した。

1. マリンバアンサンブルをつくろう 〜ドローンの音をつかって〜ではどのような音楽の力が身についたと思いますか？

記述の質問紙のために、回答の内容が重複していたが、児童の回答には、大きく分けて下記の3点についての記述があった。

1点目は、「どのように音と音を組み合わせたらいいかを考える力」である。児童はこの学習から、旋律をつくっていく音楽づくりでは、大きく和音進行が曲をつくることに関係していることがわかった。また、どのような音とリズムを組み合わせると、グループのテーマに近づくような旋律が出来上がっていくのかということがわかったという回答が多かった。

2点目は「友だちと協力して音楽をつくる力」「グループのメンバーと協力して練習する力」などがあった。

3点目は、「ドローンの効果を考えて音楽に生かす力」があった。児童は、作品が練りあがっていく過程において、ドローンの効果を生かすことで、さらにテーマについての意識が高まり演奏表現が向上すると感じていた。

また、この質問の無回答が児童112人中、2名あった。

2. この題材では、グループで「音楽づくり」をしました。グループで学習するとどんな良さがありますか？

本実践では、マリンバでアンサンブルをつくるという条件をもとに、1台を12～13人のグループ学習の形態を意図的に仕組んだ。児童の記述による回答は、大きく分けて2点あった。

1点目は、「自分とは違う新たな発見や気づきがある」「自分とは違う表現の仕方を知ることができる」など、一人では思いつかないアイディアなどを吸収して、さらに良い作品がつくれるという点である。

2点目は、「友だちから教えてもらえるよさや教えあうよさ」「グループのメンバーとの絆が深まる」などがあった。一つの作品が出来上がってい

く過程で、4つの旋律をつくり、どのような演奏形態で演奏するかという約束事を考えさせたことが、このような回答につながっている。これは、それぞれのパートがそれぞれの旋律をきちんと演奏できないとアンサンブルが成り立たないという理由からである。以上の意見が全体の9割を占めている。その他として、この音楽づくりを経験し、グループ学習で友だちと活動して実感し、この活動の良さとした記述からは、「時にはけんかもしながら、よりよいものがたくさんつくれるそれによって仲も深まる」「チームワークが学べる」「コミュニケーション力がつく」「相手のことを考え、グループのために協力して活動する大切さ」「グループで学習するとけんかしたり意見が合わなかったりするけどやりきった感やうれしさが増すよさがある」「みんなで協力することによって、作品が出来た時の達成感、やりとげた感じが個人でやるときより強い」「相手の間違いを指摘し、互いに直せる場」などの意見があった。

3. 5年生では、1学期にリズムアンサンブルをつくろう～インターロッキング」、2学期には、マリンバアンサンブルをつくろう～ドローンの音をつかって～の「音楽づくり」に取り組みましたが、どちらの実践が楽しかったですか？○をつけてください。また、そのわけも書いてください。

回答は、以下の通りである。

- ①リズムアンサンブルをつくろう～インターロッキングの音楽づくり 25%
- ②マリンバアンサンブルをつくろう～ドローンの音をつかって～の音楽づくり 75%

①についてはクラッピングの作品、②については、マリンバを1台使用したグループでの共同作品である。内容としては、①は曲の構成の約束事を指定した上で、テーマを決め、インターロッキングの仕組みを使ったリズムアンサンブルである。児童の多くが、②の実践が楽しかったとされる理由としては、マリンバ独特の音色に出会えたことやみんなで協力して4つの旋律をつくったことが挙げられた。また、マリンバでは奏法に

よってさまざまな表現が出来たことやマレットを換えることでイメージに近い音色をさがすことができたことなども楽しかった理由に挙げられた。回答には、参考曲の演奏体験で4つの旋律を交代しながら演奏するというカノン形式の演奏形態を学習したことが、自分のグループはどのような形態で演奏することが一番いいのかを考える参考になったという感想が多かった。児童はカノン形式の良さを理解しながらも、本実践では専門家形式という演奏形態を考えた。4つの旋律を図3にあるように、4人が担当し、楽器をはさんで向き合って演奏する形式である。この形式を考えた背景にはこの音楽づくりでは、インターロッキングの仕組みをつかって旋律をつくったことが挙げられる。はじめに、図1のように低音として組み合わせた2つの旋律が、図3のBグループの演奏形態のように主旋律をはさむような形になると、かみ合わせのタイミングがはずれ音の重なりがくずれてくる。児童は、この過程をくりかえすことで、どのような演奏形態にすることがいいのかを理解していった。児童はこのようなことを経験していく過程で、グループでこの演奏を成功させるには、13人のメンバーの一人一人の力が生かされることが重要であると感じた。そのことから、②の実践では75%の児童がより楽しく感じたと考える。

4. 曲を作り上げる過程で一番楽しいのは、第○段階ですか？また、そのわけも書いてください。

- ①第1段階 「構想の過程」
- ②第2段階 「探究の過程」
- ③第3段階 「構成の過程」
- ④第4段階 「表現の過程」

回答は以下の通りである。

- ①第1段階 「構想の過程」 29%
- ②第2段階 「探究の過程」 5%
- ③第3段階 「構成の過程」 18%
- ④第4段階 「表現の過程」 48%

今回の回答では、児童が一番楽しいと感じた過程は、第4段階「表現の過程」であった。

児童の記述によると、「完成したものを、さらに良くしていく楽しさを学ぶことができる」「クレッシェンドなどを取り入れ、曲のおもしろさをさらに引き出していくことができる」等が上げられた。この段階は、児童一人一人が自分のグループの演奏ができるようになってきていることもあり、余裕をもって、音楽表現にむかっているのだと感じた。

また、29%の児童が第 1 段階の「構想の過程」を楽しいと回答があったが、児童によるとテーマから楽曲全体の構想を立てることにおける柔軟な創造性において、おもしろさを感じていた。筆者としては、今後は、特に第 2 段階「探究の過程」において、音素材への興味・関心を高めるための手だてについて、今後さらに工夫する必要があると感じている。

おわりに

本研究の成果は、マリンバアンサンブルの音楽づくりの過程において、人と人を結びつける機能を内包したグループ学習となったことである。音楽づくりの授業については、一般的にみても具体的な指導法や活動における児童の姿がイメージしにくいとされてきた。また、筆者はこれまで児童に主体的な学習を促すためにグループ学習を取り入れてきたが、心をつき動かしていくような関わりが生まれにくいと感じてきた。しかし、本実践のようにマリンバアンサンブルの旋律づくりや演奏形態の工夫によって児童の心の結びつきや絆を実感する教育的にも意義のある音楽づくりの学習ができることがわかった。特に第 3 段階の「構成の過程」においてつくった 4 つの旋律の音域を構成して演奏する方法を考えてから、第 4 段階の「表現の過程」において、演奏形態の工夫や表現のためのパフォーマンスを実践させたことで、より一層効果的に作用した。参考曲として提示した<ぐるぐるマリンバ>からカノン形式の演奏をするということは、グループのメンバー全員が、4 つの旋律を正しく演奏することが基本となった。

そこで、児童には 4 つの旋律を正しく演奏する

という技術的な反復練習の取り組みを通して試行錯誤し、問題を解決して自分たちの考えによる演奏を醸成させていきたいと考えた。グループ学習の活動中の様子からは、演奏の苦手なメンバーを引き上げていくことで、少しでも学習に対する不安やメンバーの孤立がないように互いが心がけて学習をしていた。そのことは、児童による 2 のアンケートの記述から、より理解ができた。

本実践では、特にインターロッキングなどの音楽の仕組みを取り入れたことから、より多様な表現が生まれたと実感した。課題は、音楽を構成する過程をいかに工夫するか、そして、それに伴う音楽づくりの約束事をどう精選するかである。今回の実践を得て、音素材を何にするかということがその活動にとってとても重要だと感じている。また今後は、学習過程において児童にとってうまくいかなかった部分をはっきりさせるために、質問紙などを手がかりとして掘り起こし、さらに活動が充実するようにしていきたい。

このように、児童の知的好奇心が揺さぶられる素材との出会いを保障し、作品を創る過程からゴールまで飽きることのない題材を見つけ出すことが肝心である。

注:引用文献

- (1) 小島律子(1999)「思考と表現の統合をもたらす「音楽づくり」の方法原理と教育的意義—デューイ「オキュペーション」概念を手がかりにより引用する。
- (2) 平成 22 年特定の課題に関する調査(音楽)調査結果(小学校)より実践事例Ⅱに関する調査問題から抜粋し、意識調査の内容として引用する。アンケート結果の対象は、金沢大学人間社会学域学校教育実践附属小学校 5 学年 112 名である。
平成 28 年 12 月実施。
- (3) 徳田典子(2016)「考える子を育む〜学ぶ楽しさを味わう授業〜」第 67 回教育研究発表会要項 金沢大学人間社会学域学校教育実践附属小学校要項 pp.62- 64
- (4) (1)同上

- (5) 本実践で引用した感想は、すべて金沢大学人間社会学域学校教育学類附属小学校 5 年生によるものである。「音楽づくり」の過程における児童の学びのようすとして、ワークシートの感想を引用する。
- (6) 本実践で引用した絵、曲の構成、演奏形態は、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属小学校 5 年生 B グループによるものである。「音楽づくり」の過程における児童の学びのようすとして B グループが描いた絵、曲の構成図、演奏形態図を引用する。
- (7) (1)同上
- (8) カノン(輪奏)形式：本研究での参考曲の演奏形態。<ぐるぐるマリンバ>による演奏形態である。
- (9) 本実践の授業後アンケートの結果である。アンケート結果の対象は、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属小学校第 5 学年 112 名である。
平成 28 年 12 月実施。

参考文献

- ・徳田典子(2016)研究紀要第 70 集金沢大学人間社会学域学校教育学類附属小学校 音楽科教科論 pp.64-65
- ・伊藤康英著 《ぐるぐるパーカッション》より<ぐるぐるマリンバ>
- ・竹下英二(1999)優しさと思いやりの育つ音楽科グループ学習 -音楽科学習集団の理論と実際- 明治図書

A practical examinations of “music making” as ingredients of a Marimba
— Analyzing “music making” as ingredients of
a marimba ensemble by the group learning —

by

Noriko TOKUDA

We hardly see the example that general elementary school teachers, except music teachers, are having heard time during teaching or in the activities, because of less experiences in teaching method in the subject of “music making”. Because of these back ground, National educational method research organization made the materials with “Musical creation” for music classes for elementary school in November 14 2014. This is the first time to publish those teaching method for teachers. I think these are guide lines to make running the music classes smooth.

These are the introductions, based on these guide lines, I put the eyes on the 21st century types of “imagination” and “creativity” with using the ingredients of a Marimba.

keywords: creativity, marimba, music making